町村広報ごよみ

熊日コンクール1等の

〝広報うえき〟

（鹿本郡）

床屋で聞くPR評

去年の夏？鹿公連（鹿本郡公民館連盟）から招かれて山鹿図書館で広報紙研修会をやつた。雨の一日をつぶして二十人ばかりの関係者が熱心な相互研究を行つたのだが、自発的にこうした催しが企てられたのは県下で始めてのことであり、その熱情的な意欲は必ず実を結ぶものと信じていた。

果然、その後鹿公連加盟の広報紙は紙面の充実、編集の技術等々に格段の進境を見せ、十月の熊日主催「公民館報コンクール」ではその中から圧倒的に多数の入賞紙を出した。

本誌の新企画「市町村広報めぐり」の皮切りに、先ず同コンクール一等入選の「広報うえき」を選んだのは、そうした意味からである。

□ 今年は月刊確保

公民館報というと、公民館独自の広報紙にとられやすいが、これは純然たる町村広報紙と何等選ぶところはない。たゞその実務を公民館が担当しているというに過ぎないわけだ。

編集に当つているのは畠山主事で、氏は町村合併前、山本村の公民館時代昭和二十七年からガリ版の広報紙をつくつたというベテラン、それに木村教育長が責任者としてバックアップしている上、境町長がまたPRにはすこぶる熱心だから盤石の基盤である。

したがつて今年は印刷費も十五万円を獲得、雑費とも二十万という予算で、毎月発行の線を確信した。タブロイドの一頁と二頁を交互というわけだが、それにしても一回四千部としては法外に安い。山鹿の大和印刷がギセイ的に奉仕しているというのもうなずける。

□ 充実した編集会議

毎月初旬の編集会議には公民館の外、役場から各課の担当者一名宛、それに青年団、婦人会、県の改良事務所等々から代表者が出席、それぞれテーマを持ちよつて次号の取材を決める。特にトップ記事については十分に議を練つて、最重点テーマを取上げる。

編集者の畠山主事

その他の記事も一応決定したら、その執筆者を選定、といつても役場関係のものなどは大体主管課で書くのだが、ものによつては外部の人に執筆を依頼することもある。

書きつけぬ人の原稿はなか〳〵読み辛いので、畠山主事が原文を損わぬ程度に筆を入れる。場合によつては適当な人にインタビューの形で自身聞書きの原稿をつくる。

写真は役場に四台あるカメラを使つてタイムリーに撮影することにしている。

その他文芸作品や投稿も取上げる。田原公民館の前田主事が主宰する歌誌「田原坂」の同人などは常連になつている。投稿の中には編集についての批判なども あつてなか〳〵面白いという。

原稿は十五日頃までに〆切り、早速編集して印刷に廻す。校正には畠山主事が山鹿まで出向いて、職工たちの陣頭指揮をやり、組み方についても詳細に手を入れるので、この頃では職工の方でもよく呑み込んで、手間が省けるようになつたという。

□ 嘱託による全戸配布

出来上つた「広報うえき」は全戸配布で町内六十六部落の嘱託に一括依頼するが、官衙、学校団体などには直送するし別に町内の床屋にも特配している。これは来店のお客さんに見てもらうだけでなく、PRについての世論調査の機会をつかむためだ。昔も今も床屋は庶民の声を端的に聞くことの出来る点では第一の場所、畠山主事はそこから出る情報を編集の大きな参考にしているそうだ。

□ 合併町村とPR

植木町は、旧植木の外に山本、吉松、山東、田原、菱形、桜井の六カ村を合併した新しい町。急激に増大した地域と住民の連絡、和合に、広報紙の重要性を痛感した境町長が、木村教育長や畠山主事など有力なスタッフを得て、旧町村の公民館報を一本化したもの。狙いはたがわず昭和三十年五月の創刊以来二年半で、県下のトップに立つような広報紙に育てあげた。

「広報うえき」は定期号の外は時おり臨時号を出すが、中でも昨年の田原坂公園設定についての特集号は、記念式の時会衆に配られて賞讃される出来栄えだつた。

なお、植木町では刊行物の外に、青年団、婦人会、成人講座、巡回映画会等を通じても活潑なPRをやつており、スライドなどもつくつている。新生活運動で名をあげ、この間桜井知事も視察した宝田部落は植木町の一部で、PRにも一つのモデルケースとなつているようだ。

上益城のトピック ★

公益の神様布田翁　上益城は横井小楠を始め多くの偉人を生んでいるが、中でもいまだにその余徳を仰がれているのに布田保之助翁がある。文字通り命がけで築造した通潤橋によつて、白糸村の台地に水をひき百町歩近い田地を開いたのは安政元年、今から約百年の昔だが、以来今日までの産米を評価したら莫大なもの国定教科書にものせられて全国に知られている。

観光資源の宝庫　県立公園「矢部周辺」といつても案外知らぬ人が多いが、せめて内大臣の入口までで行つたらその絶勝に驚くだろう。

通潤橋、風神鐘乳洞、蘇陽峡、緑仙峡、内大臣峡、船津峡、井無田高原、甲佐岳

アウトラインだけでもこれだけある。細部にわたつたら千変万化だ。

七尺三寸の大男　牛股武ジャア事大空武左衛門といえば相撲に関心をもつ人なら誰でも知つていよう。文政頃の人で身長七尺三寸、五十二貫（一説には三十六貫）という巨人だが、生れは矢部の田所という部落だ。

細川侯がご馳走を出したら、酒三升に飯五升を平らげ、なおすゝめると「暴食はいかんと親に止められていますから、アトは両親へ土産にします」と可愛いゝことをいつた。

〝山紫水明〟のモデル　旧甲佐町中には川が流れ、その両岸に柳の並木があつて一風変つた趣きがある。

この町の出身で代議士をやつたこともある故渡辺敬昌氏が、明治の末期支那の蘇州から、楊柳を一本持ち帰つて植えたのが原種。以来しだいに増植したのだとある。この渡辺氏は明治天皇に緑川の鮎を献上して御嘉賞をいたゞいたという話もある。

高くなつた？汽車賃　日本一乗車賃の安いのは熊延鉄道だという伝説があつたスピードがないので賃金の割に長く乗つていられるという皮肉だ。ところが近年はディーゼルカーも通つたし、熊本、砥用間をつないで文字通り上益城郡の動脈となり、交通運輸の上に偉大な貢献をしている。もちろん乗車賃も高くなつたわけ。同社では別にバスも全郡に通わせている

発明の実施化に
試験費を補助

▼科学技術庁では、今年も優秀な発明考案の実施化を助成するため、補助金を交付することになりました。その総額は約二千四百万円で、一件あたり約五十万円として五十件に補助する模様です。

▼補助される発明考案は、現在特許権或は実用新案権があるものか、昭和三十二年八月末まで特許或は実用新案出願したものは限り、その技術的内容が優れていてその試験が成功すれば輸出の増進、関連技術の向上、或は又、原価切下げに寄与する等の事によつて、産業経済的効果の大きなもの、国民生活の改善に役立つと認められるものとなつています。

▼試験というは、発明考案を実際に試作したり或は見本を作製する等の試験であつて、これに要する経費の一部を国が補助しようというのです。

▼申請は県経由五月末日締切りとなつていますので、希望の方は県商工課に連絡されますと、くわしくお知らせします。

広報うえき

こうして新しい町づくり

着々進む北部地区の新らしい農山村建設計画